

講演会用勉強会 第3回

戦後・戦後民主主義

2001年11月7日 担当：長橋明子

0. はじめに

大塚英志の著作を読むと、必ずと言っていいほど出てくる「戦後」もしくは「戦後民主主義」。この二つの概念自体が大塚氏の著作の中でテーマとして取り上げられたことは実はほとんどないにもかかわらず、「戦後」「戦後民主主義」は大塚氏の言表の中で大きな軸となっていることは確かです。今回の勉強会では、この「戦後」「戦後民主主義」をとりあげてみたいと思います。

1. 戦後民主主義とは

1945年の終戦後、日本はそれまでの帝国憲法を廃し、アメリカ軍によって作られた新憲法を日本憲法として制定した。当時日本はアメリカ軍の占領下に置かれており、アメリカによって一方的に押し付けられたと言われるこの憲法は、周知のとおり「主権在民」「平和主義」「基本的人権の尊重」を三本柱としている。戦後民主主義とは、いわば帝国憲法に対するアンチとして戦後の日本に成立した民主主義のことを指している。

戦後民主主義は、丸山眞男をはじめとする知識人によって担われ、アメリカ的なリベラリズムの理念として戦後日本に定着していった。

2. アメリカの影

大澤真幸は、日本の戦後は1945年から1970年までの25年間であると言っている。^{*1}日本がアメリカの庇護の下にあることを自然に受け入れ、アメリカの軍門に下ることに違和感を覚えずにすんだのはせいぜい1970年までだと言う。この「アメリカとの関係」という問題は、江藤淳において「オキュパイド・ジャパン」というテーマで如実に現われている（安江さんの勉強会を参照）。

加藤典洋は『アメリカの影』で、江藤淳が評価した田中康夫の『なんとなく、クリスタル』（1980）に日本とアメリカの関係を見ている。アメリカを男性、日本を女性とする比喻^{*2}をこの小説（「女子大生がある日退屈して前日ディスクで知り合った男とねてみるがやっぱり退屈で、同棲している男が仕事から帰ってきてねたらやっぱりよかった、というだけの話」^{*3}）に適用した上で、加藤は次のように言う。

田中の小説に江藤がみた「批評精神」^{*4}とは、実はアメリカなしにはやっていけないという、この小説の基底におかれた「弱さ」の自覚なのではないか。^{*5}

そしてこの弱さが「クリスタルなアトモスフィア」に包まれているため見えにくくなっていることを、田中康夫は自覚している。これが江藤の言う田中の「批評精神」である。敗戦後、日本はアメリカなしにはやっていけない、という誰もが知っていたタブーを指摘しつつ、それに抗するでもなく「クリスタル」なままの田中は、江藤の抱えていたジレンマを見事に表していた。つまり「アメリカの傘があるために光がささずに閉ざされている一方、この傘なしには生きていけない」というものである。

このジレンマは、江藤が小島信夫『抱擁家族』（1965）を分析した『成熟と喪失』（1967）でさらに明らかにされていくことになる。

3. 68年革命と戦後民主主義批判

では、大澤が「戦後のおわり」と言ったところの「せいぜい1970年」という区切りは一体なんなのだろうか。これは1968年の革命をさしていると考えてよいだろう。

ノンセクトの学生組織である全共闘が主体となって起こった68年革命（全共闘）（第2回の勉強会参照）では、戦後民主主義批判がスローガンとして掲げられている。「自己批判」という理念のもとに行われた戦後民主主義批判とは何だったのか？

スガ秀実が「ポスト「近代文学史」をどう書くか？」で言うように、68年のスローガンが言う意味での「戦後民主主義」とは、60年安保において主題であった憲法第九条における反戦平和主義を指しているのではない。それは「戦後憲法において保証された『国民の権利』としての『文化的生活』のことであり、今日的な言葉で言えば『一九四〇年体制』とも呼ばれるリベラリズムにほかならない。^{*6}それは日本の高度経済成長の基盤であった1940年体制^{*7}、ひいては資本主義そのものをも意味する。戦後のリベラリズム政策に「漠然とした不安」を抱えていた学生たちは、そ

の「管理」体制からの「自由」を希求したのである。

つまりここで批判された「戦後民主主義」とは、「アメリカ的なもの」に他ならない。日本における68年革命が、「土俗的」なサブカルチャーの開花を伴っていたことは象徴的である。また、68年革命それ自体をサブカルチャーの開花として捉えるならば、押し付けられた「文化的生活」から生じるハイカルチャーに対する抵抗として見るができるだろう。だからこそそれは既成の左翼による革命ではなく、ノンセクトの学生、つまり「大衆」による革命だったのである。

4. 大衆の感受性としての戦後民主主義

大塚英志は現在における戦後民主主義批判について次のように言う。

現在批判の対象となっている「戦後民主主義」とは明瞭な枠組みや合理的な思考法からなる政治思想では当然ない。それはあくまでも戦後史の中で「大衆」たちに共有されるに至った感受性の一群であり、共通の心意をさしているはずだ。したがって戦後民主主義批判の多くが実は大衆批判であり、最近ではぼくの世代の批評家に顕著な傾向として見られるようになったサブカルチャー批判としてまず存在してしまうのはそもそも「戦後民主主義」が政治思想ではなく大衆のコモンセンスの領域に成立しているものであることを端的に物語っている。^{*8}

68年革命によって発明された「大衆」の感受性が戦後民主主義の実体として息づいているとすれば、大塚英志のこの言表は非常に納得のいくものではなからうか。

加藤典洋が『敗戦後論』(1997)で全員投票による平和憲法の選び直しを提唱したことは、民主主義を実体化して「ねじれ」をなくすことを意味しているが、「戦後民主主義」は、大塚氏によれば68年革命によってすでに実体化されているということであり、それゆえに大塚英志は「戦後民主主義者」を標榜し、そしてまた自分を「大衆の一人」としてアイデンティファイするのである。

だが問題は、この「大衆の感受性」としての戦後民主主義、というリアリティはきわめて世代的なものなのではないか、ということである。戦後民主主義が所与のものとしてあった我々は、どうやって戦後民主主義を語る言葉を獲得すればよいのだろうか。(夏合宿勉強会に戻る。)

(Footnotes)

^{*1} 大澤真幸『戦後の思想空間』(1998, ちくま新書) p.188

^{*2} この比喩は、天皇とマッカーサーが並んで写った1945年の写真が「結婚記念写真」と称されることに象徴的である。

^{*3} 加藤典洋『アメリカの影』(1995, 講談社学術文庫) p.16

^{*4} 江藤淳は『なんとなく、クリスタル』の「、」に批評精神が感じられると言ってこの小説を新人賞に推している。一方、村上龍の『限りなく透明に近いブルー』をただのサブ。カルチャー小説だと酷評。大塚英志『サブ・カルチャー文学論』も参照。

^{*5} 前掲『アメリカの影』 p.28

^{*6} 『小説 TRIPPER』2001 秋季号 スガ秀実「ポスト「近代文学史」をどう書くか?」(朝日新聞社) p.36